

地域振興の手段としての定期市（六斎市）と内陸水運との関係について

国土交通省九州地方整備局 正会員 ○ 吉田 秀樹

1. はじめに

近年、歴史・文化・風土に着目したまちづくり・みなとまちづくりによる地域振興が進んでいる。特に東日本大震災以降その傾向は強まっている。その一手法として、朝市や六斎市など定期市を観光による地域振興の手段として存続、新規開催・復活させる場合がある。しかし、定期市を成功させるためには、地域での定期市の成り立ちについて十分調査し、関連付けて開催・活用することが不可欠である。江戸時代、国内商品流通経済が活発になるとともに、各地の在郷町などの都市において六斎市などの定期市が活発となった。これらは、沿岸海運、内陸水運さらにはその結節点となる湊、河岸などと結びつき発展するものも見られた。しかし、明治以降特に戦後において、店舗商業の発達、交通手段の変化などにより、これら定期市は一部を除き衰退するものが多い。今、定期市について、内陸水運や湊、河岸との関係、さらには都市との関係を整理し、近在の生活物資調達の場合とともに今後の地域活性化に活用する必要がある。このため、本研究では、定期市（六斎市）について、地域振興の手段とするため、現在も多数存在し開催されている新潟県を事例に整理し、内陸水運との関係について分析するものである。

2. 六斎市の起源と全国的現状

定期市とは、寺社領の境内など公共的な空間がとして「市」の場として利用され、町立ての要素の一つとなり、三斎市、六斎市等として発達した。ちなみ月に6回行われる定期市を「六斎市」（ろくさいいち）と呼び、室町時代ころから行われるようになった。

WEB、書籍などから六斎市など定期市を調べ、その成立と変遷を調べた結果、現在も六斎市が残っているのは、新潟、秋田、南部地方、房総半島である。また、過去、埼玉、群馬、山形では盛んに行われていた。¹⁾ 特に、新潟、秋田については、内陸水運の発展と河岸・在郷町の発展と密接に関係している。

3. 新潟県における定期市の分布と内陸水運等との関係

図-1 に新潟県主要部における六斎市の分布を示す。また、表-1 には新潟県全体における六斎市を含む定期市の集計表を示す。全体で65箇所の定期市があり、41箇所は六斎市である。図-1 に示すとおり河川沿いに六斎市は集中している。

また、図-2 に新潟における近世初期の沿岸・内陸水運網を示す。信濃川、阿賀野川、加治川を中心に内陸



図-1 新潟県主要部における六斎市の分布²⁾

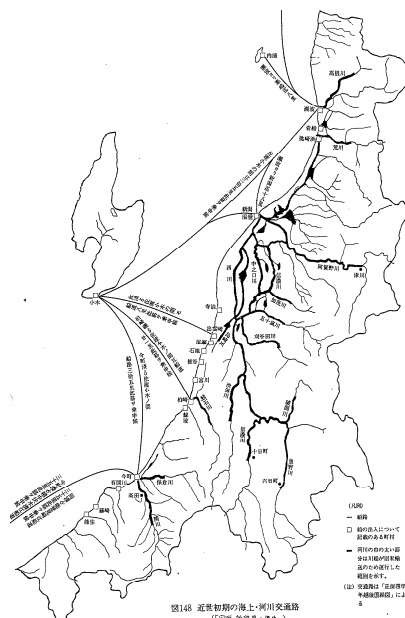


図-2 近世初期の沿岸・内陸水運網³⁾

キーワード 地域振興、定期市、六斎市、内陸水運

連絡先 〒801-0841 北九州市門司区西海岸 1-4-40 北九州港湾・空港整備事務所 TEL093-321-4631

水運網が発達していたことがわかる。

表-1 に、新潟県における、地域別の、立地、定期市種類、成立時期の割合を示す。新潟県における定期市はほとんどが河川や海沿いの湊若しくは河岸に存在し、かつ新潟湊を河口湊とする信濃川・阿賀野川水系沿いに存在する。下越、中越では、その形態が六斎市であり、かつ成立時期が江戸時代及びそれ以前であることがわかる。特に下越においては、六斎市の8割以上が江戸時代及びそれ以前の成立であり、現在も続いていることがわかかわかる。

図-3 に、下越地方の六斎市の開催日の形態について示す。近接する六斎市について同じ日に開かれな。市へ出店する営業者、購買者の都合上、毎日どこかに出店、購入できる仕組みとなっている。

図-4 に、下越の葛塚市の開催場所の変遷を示す。内陸水運の盛んな時期は河川沿いに発展したが、その後道路沿いに変遷し道路の占有の関係から現在に至っている。

表-2 に現在の新潟県に見られる六斎市の類型を示す。4つに分類できる。活発な六斎市もあるが、交通の変化や商業変化に大きく影響を受けているところも多い。また高齢化が進んでいる。

4. 他地域での地域活性化としての六斎市の活用状況

近年、観光資源、地域活性化の手段として「六斎市」を復活しているところがある。例えば、中山道中津川宿六斎市、奈良今井町六斎市、小田原城北条六斎市などである。歴史、文化をキーワードとし、「六斎市」の今後の方向性の一つとして考えることが出来る。ただし、地域の生活に密着した「六斎市」とは若干かけ離れている。

5. まとめ

今回、新潟県の六斎市は、内陸水運と密接に関連した歴史があること、現状の形態から4分類出来ることがわかった。今後、全国の六斎市について資料収集するとともに、六斎市の踏査ヒアリングを充実しつつ資料の正確さを増してゆきたい。また、「六斎市」を地域活性化の手段として位置づけ形態を明確にし活用方策を提言したい。個々の六斎市のレポートは新潟港湾・空港整備事務所「越佐みなと通信」を参照されたい。

参考文献 1)水路水位差解決手段としての閘門等に関する資料収集整理, 港湾空港建設技術サービスセンター, 2010.
2)石原 潤:定期市の研究, 名古屋大学出版会, p. 345, 1987.
3)小村 弼:図説新潟県の歴史, 河出書房新社, 1998
4)黒埼町史 通史編, 黒埼町, p. 288, 2000.
5)越後・佐渡の定期市, 新潟県教育委員会編, p. 126, 1977.

表-1 地域別の立地、定期市（六斎市）と成立時期の割合

地域	全体	(河川+海)/全体		河川/(河川+海)		六斎市/河川		(江戸以前+江戸)/六斎市	
	箇所	箇所	割合	箇所	割合	箇所	割合	箇所	割合
新潟	8	8	100%	8	100%	3	38%	1	33%
下越	31	29	94%	26	90%	23	88%	19	83%
中越	12	12	100%	12	100%	9	75%	4	44%
上越	5	5	100%	5	100%	4	80%	0	0%
佐渡	9	9	100%	2	22%	0	0%	0	0%
	65	63	97%	53	84%	39	74%	24	62%

100-75% 74-50% 49-25%

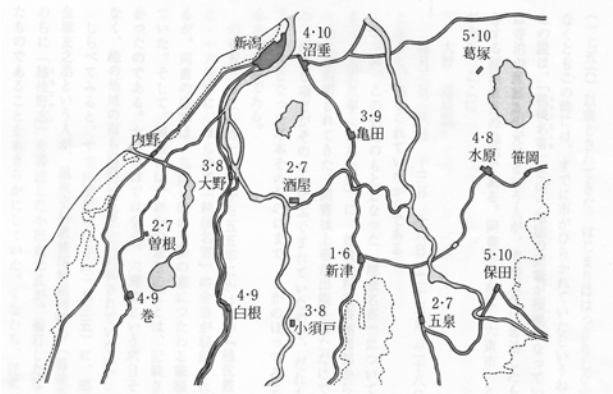


図-3 六斎市の分布と開催日(下越)⁴⁾



図-4 葛塚市の開催場所の変遷と河川⁵⁾

表-2 新潟県における現状から見た六斎市の類型

① 現在も工夫をしつつ活発な六斎市 (葛塚)
② 活発ではあるが高齢化が進んでいる六斎市 (亀田)
③ 交通変化 (内陸水運の衰退) の影響を大きく受けた六斎市 (大野)
④ 商業活動の変化に大きく影響された六斎市 (三条)